

宮内彩の

ワードローブ 新・発見・見



kate sylvester



world



zambesi



trelise cooper



thom D



nicholas blanchet

今回の「ワードローブ新発見」は番外編として、10月21日に行われた第2回目のNZファッションウィークの話題を取り上げてみました。日本ではなかなか手に入らないNZデザイナーのファッション。帰国してから他人と差をつけるためにも、一着は日本に持ち帰って着たいものですね。



宮内 彩 みやうち あや

東京生まれ。西町インターナショナルスクールを経て、スイス、ル・ロゼ高校、米タフツ大学卒業。帰国後、パリ・ミラノ等世界のコレクションを取材。雑誌・新聞・テレビ・ラジオ等でファッション・コラムニストとして活動。オークランド在住の中村嗣氏と結婚のため、2000年より生活の拠点をNZに移動。2001年、長男・章人君誕生。子育ての合間を見て、旅・食・住等ライフスタイル全般のコラムニストとして英語及び日本語で執筆活動を続けている。著書は近代文藝社「おしゃれのエッセンス」おしゃれのエッセンス 旅コレクション(母・大内順子と共著)等。毎日新聞社「The Mainichi Weekly」には定期的に英語で執筆中。NZでの生活のエッセイが載っているホームページはwww.ouchi-junko.com
プロフィールPhotoの撮影: Yuji Hori

ニュージーランド的なファッションショー

一昨年、ニュージーランドに移住するまで、十数年間、必ず取材していたパリ・コレとミラノ・コレクション。年に2回のオートクチュールと、年に2回のプレタポルテ。多い時は、パリとミラノだけではなく、マドリッド、ロンドン、ニューヨークにももちろん東京のコレクションも取材していた。期間は1回でひと月を超える長丁場。パリとミラノだけでも、3週間の出張になる。この期間は土日もお構い無しに、朝から晩まで、1日に十数回ものファッションショーが続けて行われる。最近の過密スケジュールでは、一人で全てを回り切ることは不可能だ。

NZに来て、これでははるかにコレクションともお別れかしら」と思っていたら、昨年の10月よりNew Zealand Fashion Weekが開催されることになった。ここでは上記のメジャーなファッション都市のよつに年に2回行うのではなく、年に一度のイベントだ。期間も3、4日と短く、週末にかかることもない。今回はグループショーを含む、26のショーが行われた。オークランド中を駆けずり回ることもなく、ほとんどのショーがメイン会場で行われるものがある。と言っても、ファッションデザイナーというものは、どこの国でも他人とは違うことをやりたいがるもの。ZambesiやThom Dなどのこだわり派はオフサイトでショーを行う

た。ミラノではまだマシだが、パリなどは街中を移動させられ、ショーもスケジュール通りには進まず、夜になると1時間半から2時間も遅れることさえ珍しくない。デザイナーのイメージ重視の自己主張も、観客にとっては迷惑な話なのだ。

K-WI 気質

欧米のコレクションと何が一番違うかと言うと、たぶんNZのお国柄、人々がのんびりして、空気に緊張感がないことだろう。ミラノでもパリでも、皆がギリギリして、いじわるそうな女性編集者達が黒尽くめの衣装に身を固め、大急ぎで動き回る姿が目につく。ここではというと、年に一度のファッションのお祭りを皆で盛り上げて、楽しもうというスタンスだ。案内係の人たちも微笑みを絶やさず、メディアセンターのスタッフも親切だ。たとえ長い行列ができていたとしても、イライラして押す人もいない。また、子供や赤ちゃん連れの姿も目立つ。どんな場にも子供がウエルカムされるのは、やはりNZらしい。1日はパブリックの為に解放しているところも市民も参加するイベントだということも強調している。欧米のように、ファッションプロダクトだけの目には触れない生のコレクションを見たい人は誰でも見られるというのがある。ありがたい話だ。

見たえのあるショーも

普段、着るものあまりこだわることのないキウイだけに、いわゆる、ファッション的な装いに身を包んでいる人たちを一度にたくさん見る事ができるのは、こんな機会しかない。ファッションウィークの時期にオークランドタウンホール(メイン会場)の周辺にいたり、ちょっと妙な格好をしているファッションピーパーと遭遇するだろう。と言っても、ヨーロッパの高級ブランドの服があまり手に入らないこの土地では、皆が着ているものもパリやミラノとはだいぶ異なる。やはり、ローカルなNZデザイナーの服が目立つ。オーストラリアからのプレスやバイヤー達も多く、彼らのほうが、かなり海外ブランドには敏感なようだ。

さて、この国のファッションと言えば、一部では、次のベルギーと言われるようにアバンギャルドな味わいが売り物。明らかに他の土地のファッションとは一味違う。ヨーロッパや日本のアバンギャルドのどこか陰湿で暗い感じとは打って変わって、アバンギャルドと言っても明るい。これもお国柄だろう。WorldやTrelise Cooperなど、大御所デザイナーたちのショーは、やはりそれなりに見ごたえがある。また、NZならではのニットブランドには、素材の良さが見られる。でも、他のいわゆる、大衆的既製服ブランドはトレンドはつかんでいるものの、どうしても素材感、縫製や仕上げに物足らなさを感じてしまう。

1シーズンにいくつものショーを見ていると、一点一点を覚えておくことは、不可能だ。私はシンプルに、記憶に残らない程度のもは、覚えておく必要もない」と判断している。全体像として、今年のトレンドはこんな感じだ。なあ」というのは自然と浮かび上がってくるものだ。ただ、トレンドだからと言って、むやみに飛びついても馬鹿らしい。自分のスタイルに合うものから、これはやってみようかな」と思っ、こなしや色使い、アイテムを見つけ取り入れれば良いと私は思う。